

◆ コスモエネルギーホールディングス（5021）

2020 年度 第 2 四半期決算 アナリスト・機関投資家向け決算説明会 質疑応答

－ 本資料には、将来見通しに関する記述が含まれています。末尾に注意事項を記載しています。 －

1. 日時 : 2020 年 11 月 13 日（金） 10 時 00 分～11 時 00 分
2. 出席者 : 63 名
3. 主な質疑内容 :

Q1:風力発電について、2030 年度に洋上風力だけで 60 万 kW 超となっているが、これは前のページで説明している 3 つの海域が実現することで 60 万 kW 超になるという理解でいいのか。また、個別のプロジェクトについて具体的にイメージを教えてください。

A1:促進区域、有望区域、一定の準備段階に進んでいる 3 つの区域にて、獲得できれば 60 万 kW 超になると考えている。個別のプロジェクトについてはジョイベンパートナーとの比率等が流動的であることから、具体的には申し上げられない。

Q2:洋上風力に係わる設備投資がどのあたりから増えてくるのか教えてください。また、投資がバランスシートにフル連結されるようなことはないと考えてよいか。

A2:投資は主に次期中計から発生する予定になっている。また、現在我々が想定している中では、フル連結はないと考えている。

Q3:コロナ影響の試算について、通期で▲720 億円となっているが、各セグメントの計算根拠や、来期への回復の道筋はどういうファクターが必要か教えてください。

A3:コロナ影響を特定するのは難しく、厳密な精査のもとでの試算ではないのが前提となる。石油開発では原油価格の下落として前年対比▲393 億円、石油化学はコロナ影響により需要が戻り切らず、供給が過剰に傾いた結果として、価格影響にて前年対比▲152 億円、石油事業では原油価格下落による自家燃コスト改善+117 億円、JET の需要が大きく落ちている影響で▲197 億円、ガソリン需要を中心とした、四品数量の減販により▲99 億円と試算している。コロナ影響が無くなった場合に全てが戻ることはないと思うが、相当部分は戻ってくると認識している。

Q4:配当についての考え方を財務体質のターゲットとの兼ね合いで教えてください。

A4:昨年は残りの中計期間に財務ターゲットを達成できると自信を持って増配に踏み切った。しかし今年にはコロナ影響により、想定からだいぶ下振れしている。そのような中でも 80 円配当を据え置きながら、財務ターゲットを達成できると考えている。優先順位としては財務ターゲットを達成する中で、配当など株主還元を考えていきたい。

Q5：洋上風力について、2030年度の100万～150万kWおよび長期ビジョンの300万kW超について収益としてはどのくらい稼げるか、イメージで教えてほしい。

A5：過去のアナリストミーティングにて2030年には約100万kW、収益目標は200億円と申し上げた。当時から競争条件が激化してきているが、コストを下げるなどで対応し、200億円規模の風力発電事業を2030年前後に築きたいのは今でも変わっていない。300万kWは我々の希望も入っているが、現時点でオープンにしていないパイプラインがかなり入っているのは事実。また、今の送配電の考え方では開発に移行できないが将来、政府の考え方が変わってきたら浮上してくるような案件も抱えており、全くの夢ではなく300万kWを狙っていきたい。

Q6：国内の石油精製マージンが順調に推移しているが、足元のマージンを維持していくためにどのようなことができると考えているか。

A6：流通の構造が大きく変わり、いわゆる昔の業転玉、業転チャネルがほとんど消滅、または極小化しているのが実態と考えている。その環境の中で、我々の仕切価格が通っている状態が長く続いている。従来では我々が仕切価格を唱えても、業転玉が足を引っ張り下がっていったのが実態であったが、現在の構造で安定しているのが事実ではないかと考えている。各元売りは同じようなコスト構造になっていることから、これから先についても同じように仕切価格を打ち出していったら、それが通る構造になっていると考えている。

Q7：日本国内の需要が減っていく中で、石油精製能力の削減が伴っていかないと、需給バランスが崩れ、以前の状態に戻ってしまうなどはないか。

A7：装置稼働の余剰分を国内に出すことは可能であるが、それは得策ではないと考えている。輸出が不採算になった場合は、装置を閉める方向にドライブがかかると考えている。

Q8：石油化学について、通期見通しでは125億円の経常損失と、主には市況が効いているとは思いますが、黒字化ないし赤字縮小のためにどのような策を打っていくのか。

A8：エチレン、プロピレンの市況が戻ってきており、オレフィンに関しては単月で黒字に変わってきている。一方、アロマはずっとひどい状況が続いているが、足元は少し良化していると見ている。具体的にアロマの装置は、ナフサまたはMXをパラキシレンにする2系列のラインを持っている。市況に応じて稼働を調整しているが、やはり抜本的には市況の回復を待つしかないと考えている。

Q9：株主還元について、以前は「財務体質を考慮しながらも株主還元比率を高めていく」という文言が盛り込まれていたが、コロナ影響によって株主還元を上げていくタイミングが若干後ろへずれてきているのか。

A9：以前はまずネットD/Eレシオが2倍を切ったら、株主還元を考えたいと申し上げてきており、2倍を切ったときに80円へ増配を行った。今年はコロナによりイメージしていた回復軌道よりずいぶん遅れをとってしまったので、まずは株主還元をステイとして、早く元の状態に戻すのを優先している。

元々は財務体質と株主還元を両建てで考えていきたいとしていたが、今はコロナで財務体質が悪化しているため、まずは先に回復しなければならないと考えている。

Q10:風力発電について、国として再生可能エネルギー、脱炭素を推し進めていく上でどのような政策的な後押しが期待されるか、もしくは必要としているかを教えてください。

A10:本格的に洋上風力をやるとなると、かなりしっかりした財務体質が必要になる。最近は大手が参入してきた状況で入札制度となり、国としては価格をある程度抑えながら拡大していきたいという政策に転換していくのではと考えている。国としては徐々に風力有利になるような制度改定がなされているが、系統連系の考え方、新規参入者への負担の仕方、港湾整備の問題など、インフラ面において国主導で整備してもらいたいと考えている。

Q11:上期の石油精製マージンの水準感を期初計画対比で教えてください。また、下期の水準感も同様に期初計画に対して増額しているか、縮小しているか教えてください。

A11:上期の四品マージンは公表から若干上振れ。上期のマイナスタイムラグの試算が 50 億円となるが、それを含めても若干よかった形になる。下期の四品マージンは上期実績並みの想定。

Q12:New の観点で洋上風力以外に 2 番目、3 番目の事業があれば教えてください。

A12:課題であると理解しているが、他の新規事業がなかなか見つからないのが実情。まさに今は洋上風力に追い風が吹いており、まずはここに絞って頑張っていきたいと考えている。

以上

本書の記述及び記載された情報は、将来についての計画や戦略、業績に関する予想および見通しの記述が含まれております。これらの記述は、現時点で入手可能な情報から判断した見通しによるものです。
このため、実際の業績は、様々な外部要因により、本書に記述および記載された情報とは異なる結果となる可能性があることをご了承ください。